

まえがき

VG 槻輪は、平成 19 年(2007 年)「わがまち紹介」活動で京都大学本農場を訪問し、農学博士 北島宣先生が講義室で全体説明と安満遺跡をスライドで説明して頂き、その後、蔬菜農場・水田・果樹園の各部門の先生方に現場で詳細な説明をして頂きました。

京都大学大学院農学研究科附属農場(京大農場)は、大正 13 年(1924 年)農学部の創設にともなって北部キャンパスの農学部構内に開設され、その後変遷を重ねて、高槻市八丁畷町の本農場、古曽部町の古曽部温室および農学部構内の京都農場から構成されていました。

昭和 3 年(1928 年)に開設された本農場には、本館・別館(技官室)・実験棟からなる。本館は、昭和 5 年(1930 年)に建築された木造の建物で西欧的な景観を生み出している。開設した当時は、大阪府三島郡磐手村大字安満(あま)といい、純然たる農村地帯であった。周辺には、紀元 3 世紀頃に築造されたと思われる安満宮山古墳があり、その南側には当時の村落の跡がある。村落の跡は農場の敷地のかなりの部分を占めている。農場開設当時に遺跡の調査が行われ、安満遺跡での村人の生活の様子や当時からすでに稲作が行われていたこと等も判明しました。

安満遺跡(弥生時代の環濠集落域・生産域・墓域を含む集落跡)

この遺跡は、昭和 3 年に京都大学農学部附属農場を建設する際の工事中に発見されたといわれている。三島地方ではじめて米作りを行ったのは、安満の集落です。この遺跡は住居群のまわりに濠をめぐらす環濠集落跡で、南側には用水路をそなえた水田がひろがり、東側と西側は墓地になっていました。全体では東西 1,500m、南北 600m に及び、当時の土地利用が明らかになっている貴重な遺跡です。

多数の弥生土器とともに、青銅製のヤジリや木製の農具、珍しい漆塗りのカンザシやクシ、勾玉などの装身具などもみつかっています。

弥生時代から鎌倉時代まで約 1400 年間続いた集落があった。

これらの貴重な遺跡が、京大の農場であったがために宅地化等されることなく保存されてきました。今後は、「安満遺跡公園」として安満遺跡が保存されることを願い、ガイドブックを作りました。



京大本農場本館前のイチヨウ並木の道路